

大澤光民 鑄ぐるみ線文花器

MOVIN' college

高岡の伝統工芸を鑑賞する学科

2

高岡銅器の精華

高岡銅器の歴史は、主材の金属が鉄から銅へと移り、さらに銅鑄造を母体としてアルミ製造業も栄えるという、激動の変遷を重ねている。

作られてきたモノの用途形状も、多種多様。鉄の時代には鍋釜や鋤鍬。ついで仏具や梵鐘、手の込んだ置物や花瓶という銅器類。戦後は銅像とアルミ製品の一大生産地として知られる。

すなわち高岡銅器とは、銅に限らず金属を融かして固め、形を作る鑄造業の総称なのだが、そのなかでも、高岡銅器の栄光を示す典型例として多々挙げられるのが、彫金の超絶技巧を旨とする、明治期の輸出向け美術工芸品である。

だが、高岡銅器の歴史全般を実作に即して丁寧に見ていくと、明治期の装飾過剰な作品は、むしろ特殊な性格のものだったことに気づく。

実のところ、高岡金工の本質は、まずは実用性に沿った、無駄のない端正な形状にある。そのうえで高度な装飾の技が駆使されるが、これ見よがしの派手なものではない。見栄よりも実質を尊び、隠れた部分に贅を尽くす、街の文化的気質が投影されている。加えて独創的な技法開拓に挑戦するのが、高岡工人

の特質なのだ。

こうした高岡銅器特有の美意識を最も色濃く受け継ぐのが、人間国宝・大澤光民の芸術である。ことに1990年代半ば以降の諸作では、スタイリッシュな形状と独自の「鑄ぐるみ技法」により浮かび出た赤と白の金属線の装飾



大澤光民《鑄ぐるみ線文花器》
平成7年(1995) 高さ 35.0 幅 15.0 cm
高岡市所蔵

が一体化することで、作品自体が存在感をエネルギーのごとく放出しており、観る者を大きく魅了する。

実用的でありながら、芸術品。それは、産業工芸と美術工芸の融和を目指してきた高岡銅器の辿り着いた、理想の境地の精華なのである。

鑑賞のポイント

●point1

端正な形状は、高岡銅器の美的向上に尽力した師の可西泰三から継いだ造型感覚の表れ。

●point2

モダンかつ有機的な金属線の文様構成は、もう一人の師・金森映井智の美意識を継承。

●point3

ただし、線文は象嵌ではなく、大澤が独自に開拓した「鑄ぐるみ」技法で表されている。



大熊 敏之

富山大学大学院
芸術文化学研究所 教授

[専門分野]
日欧近世近代美術交流史、
工芸・デザイン史、
日本伝統造型史論

FUTAGAMI

<http://www.futagami-imonono.co.jp/>

広告

いいおと こいずみ



小泉屋
koizumiya

株式会社 小泉製作所

〒939-1118 富山県高岡市戸出栄町 57-5
TEL : 0766-63-6590 FAX : 0766-63-6591
MAIL : info@super.co.jp HP : http://ioto.co.jp

広告